

拓本と写真で綴る・文学碑シリーズⅡ

続 茨城の文学碑百選

堀込喜八郎編著



筑波書林

文学碑シリーズⅡ

続茨城の文学碑百選

堀込 喜八郎 (ほりごめ きはちろう)

大正10年3月 茨城県下館市に生れる

昭和13年3月 茨城県立真壁農学校卒業

昭和17年2月 従軍、中国河南省杞県警備軍事指導官

昭和22年3月 復員、農業に従事し日本蔬菜品種愛好会(渡辺誠二会長)
に所属、蔬菜品種改良に務む

現 在 『青い鳥ジャーナル』『月刊筑波野』編集委員を経て現
在フリー、ライター

茨城県郷土文化研究会員、茨城民俗学会員、古文書研究
会員、日本拓本研究会員 「拓本といしぶみの会」主催

論 文 「下妻多賀谷・下館水谷合戦考」「頭書に鴿字のある石
塔」「幕末期の寺小屋教育と川口霧湊」ほか多数

著 書 『下館の石仏・石塔』(新世紀書房)
『下館の文化財』(私家版)
『茨城の文学碑・名碑百選』(筑波書林)
『芭蕉句碑を歩く・茨城の五十八基』全四巻(筑波書林)

現 住 所 下館市二木成462 〒308 電話0296-24-8425

続
茨城の文学碑百選

文学碑シリーズⅡ

平成二年九月二十日発行

編著者 堀込喜八郎

発行者 菊田俊男

発行所 筑波書林

発売元 茨城図書

土浦市港町一四十二井上ビル

電話〇二九八―三二二一九六

振替字都宮一三三四

©一九九〇



『続・茨城の文学碑百選』の刊行に寄せて

『拓本と写真で綴る茨城の文学碑・名碑百選』『芭蕉句碑を歩く——茨城の五十八基』を読んで、つくづく読みにくい碑文をこれほどよく解読し、調査研究した文献はこれまでなかったので、それだけにありがたく感謝しておりましたが、このたび『続・茨城の文学碑百選』に接し、あらためて堀込さんを始め「拓本といしづみの会の皆さんの郷土愛の深さと文学碑に対する情熱と努力の程がしのばれて心から敬意を表する次第であります。

たしかに敗戦とともに戦前の家族制度は崩壊して核家族となり、お盆やお彼岸はありましても祖先の墓を守ってくれる人は少なくなりました。しかし単なる一家の墓碑や個人の顕彰碑と異なり、文学碑は文化財として末長く守りつづけられるにちがいありません。文学碑に刻まれた歌を句を詩を読むことによって茨城の皆さんが郷土の文化の息吹きを感じとっていただけたら、著者たちにとってはこれ以上の幸せはないのではないかと思われてなりません。

広く江湖に薦める所以であります。

平成二年 盛夏

常磐大学長・県立歴史館長 市村 正二

はじめに

わが郷土いばらきは、周知のとおり芭蕉が約三百年前、潮来や鹿島地方を訪れ、多くの名句を詠み紀行文『鹿島詣』を残している。また与謝蕪村は砂岡雁宕をたより寄寓、十年間結城に滞在し、摸索的な新興文人画風を習作し、宰鳥から蕪村と号を改め『宇都宮歳旦帖』を処女出版した。小林一茶も布川や守谷に長逗留し、潮来や北浦まで足をのぼして帆津倉の李尺邸を訪れ『七番日記』に優れた句を数多く書き残した。

また遠くは室町末期の連歌師、宗祇は応仁二年の晩秋日光、白河へ旅し、その年の春から夏にかけて村松虚空藏堂に滞在し「南無虚空藏尊」の名号を頭において歌十首を詠んでいる。

古来から、山紫水明の茨城は歌枕としての筑波・師付の田井・さくら川・浪逆の海・麻久良我など、多くの名山、名勝があり、文学的風土に恵まれてきた。このため韻文・散文を問わず県内の文学が興隆し、近代では長塚節・横瀬夜雨・野口雨情・菊地幽芳・高田保その他多くの文人を生んだ。加えて多くの文人・墨客がこの地を訪れ、その足跡は茨城県内すべてにわたっている。そして人々はそれを後世に残そうとしていしづみに刻み込んでモニュメントとし、各地に文学碑を建ててきた。しかしこれらいばらきの文学碑の調査、研究は他県に比して著しく後れていることは大方の指摘するところであり、僅かに本山桂川の『旅と郷土の文学碑』室伏勇の『茨城の文学碑』が出版されているが、これとて数十基を収めただけで、確たる資料を持たないのが現状である。

文化はみんなで耕し、作り、育てるもの—という考えから、私たちは「拓本といしづみの会」を結び、県内の文学碑の所在を正確につきとめ、数を正しく把握するため、毎月県内各地を訪れては調査を続け、それらの碑を拓本に採りはじめてからすでに十年の歳月が流れた。そして不毛の地といわれる茨城にも、俳句・短歌・詩・児童文学・散文などあらゆるジャンルの文学碑が九百五十餘基もあることを確認した。

昨年は会発足八周年を記念して、この中から百碑を選び『茨城の文学碑・名碑百選』を出版したところ、県内外各地の方々から意外な反響をいただいた。これまで纏った資料を持たない分野だっただけに発刊後わずか数か月で完売するという人氣に驚いたものである。しかし、県内に建つ九百五十餘にもものぼる膨大な碑のなから、敢えて『名碑百選』として編んだだけに、いばらきの文学を語る上

で欠くことのない多くの名碑を収録し得なかった恨みがあつたことは否めない。

「私の地方にはこんな有名な碑が建っている。ぜひ続篇を出版して収録して欲しい」などの要望が各地から寄せられているため、さらに百碑を選び、前著で脱漏したものを拾い補うため、このたび『続・茨城の文学碑百選』を出版することにした。

ここに掲げた拓本は「拓本といしぶみの会」会員が、県内各地を探訪し採拓したものである。周知の通り採拓は日光の強弱や風の影響を受け易く、良い拓本が得られず同一地を再三にわたり訪問して採拓するなどの根気を要し、また風化の進んだ古碑など高度な採拓技術を駆使した会員ひとりひとりの汗と膏の結晶により生まれた作品である。

本書の著作は、前著に続き次の選択基準を設け百碑を選んだ。

一、なるべく人口に膾炙している秀歌・名句を選ぶ。

一、芭蕉句碑は私の先著『芭蕉句碑を歩く―茨城の五十八基』があるので五基にとどめた。また一人の名碑が数多くあっても五基以内にした。

一、一地区に偏せぬよう、県内各市町にわたるよう配慮した。

一、名碑であっても採拓不能の大碑や、採拓許可を得られぬ碑は除いた。

以上の基準により百碑を選んだが、独断と偏見の謗りを招くこともあろうかと胸を痛めている。しかし有意義な発願により碑に合致した場所、優れた造形美、よき揮毫者、名手の石工などを兼ね備えている碑は数少なく、選択に努力したことをご了承願いたいものである。本書の著作にあたっては、碑文、引用文はもちろん、本文中においても随所に旧制漢字を使用した。いうまでもなくこの種のものの記述は、当用漢字のみでは用が達せられないからである。また碑の大きさは碑の写真下に高さ×幅をcmで示してあるから、拓本の大きさは原碑から概算されるようお願いしたい。

本書を草するにあたり荒井萬平先生やその他多くの方々から指導助言をいただき、また資料を提供して下さった各地の方々に衷心より深くお礼申し上げます。また採拓にあたり探訪先の各地で心より便宜を与えられ、ご協力くださった方々にも厚く感謝の意を表します。本書の序文をわざわざご執筆賜った市村正二先生や、拓本写真の撮影に協力下さった栃木県佐野市の拓友、内田延二氏の温情に深く敬意を表します。また、題字の揮毫をいただいた飯野白延先生に厚く御礼申し上げます。

最後にこの出版を引き受けられた筑波書林菊田俊男社長の厚誼と挾援とに対し、深甚なる感謝の誠を捧げるものである。

平成二年四月十日

雑草庵にて

堀込喜八郎しるす

続、茨城の文学碑百選 目次

序 市村 正二

はじめに 堀込喜八郎

1 平潟八幡の芭蕉句碑	北茨城市平潟町、八幡神社	8	20 藤田東湖正気歌碑	東茨城郡大洗町、常陽明治記念館	46
2 日本美術院歌碑	北茨城市大津町、五浦	10	21 土方定一詩碑	東茨城郡大洗町祝町	48
3 野口雨情七つの子詩碑	北茨城市磯原、精華小学校	12	22 義公生誕地の歌碑	水戸市棚町三丁目、義公祠堂	50
4 西行鶴の鳥歌碑	日立市田尻町、鶴の島海岸	14	23 烈公常磐神社歌碑	水戸市常磐町、常磐神社	52
5 長塚節水木浜歌碑	日立市水木町、田楽原	16	24 大高富久太郎歌碑	水戸市天王町、神崎寺	54
6 大竹孤悠句碑	日立市宮田町、かみね公園	18	25 野口雨情四丁目の犬詩碑	水戸市本町一丁目通り	56
7 能因法師歌碑	日立市中深荻町、なでしこ山	20	26 滝けん輔句碑	水戸市八幡町、祇園寺	58
8 小松崎爽青句碑	日立市入四間町、御岩神社	22	27 愛宕神社の芭蕉句碑	東茨城郡茨城町小幡、愛宕神社	60
9 烈公月居山歌碑	久慈郡大子町袋田、月居山頂	24	28 高橋多一郎歌碑	東茨城郡茨城町長岡、楠公神社	62
10 吉田高浪袋田句碑	久慈郡大子町袋田、三六亭	26	29 本間松江句碑	東茨城郡小川町小川、天聖寺	64
11 近衛忠熙歌碑	久慈郡大子町下野宮、近津神社	28	30 菅原道真歌碑	東茨城郡小川町世楽、八文字邸	66
12 幸久橋の万葉歌碑	常陸太田市上河台町、幸久橋畔	30	31 平輪光三歌碑	行方郡麻生町天王崎、八坂神社	68
13 烈公小松寺歌碑	東茨城郡常北町上入野、小松寺	32	32 野口雨情潮来詩碑	行方郡潮来町、稻荷山公園	70
14 義公石塚薬師寺歌碑	東茨城郡常北町石塚、薬師寺	34	33 潮音寺の万葉歌碑	行方郡潮来町の出町、潮音寺	72
15 阿字ヶ浦の万葉歌碑	那珂湊市阿字ヶ浦海岸	36	34 藤原時朝息栖歌碑	鹿島郡神栖町息栖、息栖神社	74
16 天狗党供養碑	勝田市三反田、百色山	38	35 義公烈公高須崎歌碑	行方郡玉造町高須	76
17 虚子三代句碑	東茨城郡大洗町、大洗磯前神社	40	36 烈公円妙寺歌碑	新治郡玉里村上玉里、円妙寺	78
18 ボオド、レエル詩碑	東茨城郡大洗町、大洗美術館前	42	37 藤田久仁夫歌碑	新治郡玉里村下玉里、農民会館	80
19 徳富蘇峰詞碑	東茨城郡大洗町、常陽明治記念館	44	38 堀口敏夫歌碑	新治郡出島村安食、大宮神社	82

39 石岡小学校の万葉歌碑	石岡市総社、石岡小学校	84
40 国分寺の芭蕉句碑	石岡市府中、常陸国分寺	86
41 井阪高德歌碑	東茨城郡美野里町柴高、稻荷神社	88
42 つくばねの万葉歌碑	新治郡八郷町湯袋、国民宿舎	90
43 湯袋峠の万葉歌碑	新治郡八郷町湯袋、ライオンズ広場	92
44 吉田次郎歌碑	新治郡八郷町柿岡、高友山丸山公園	94
45 九条武子歌碑	新治郡八郷町大増、大覚寺	96
46 小林一茶大覚寺句碑	新治郡八郷町大増、大覚寺	98
47 武具池の殉難碑	東茨城郡内原町杉崎、武具池	100
48 佐藤豹一郎句碑	西茨城郡友部町南友部、佐藤邸	102
49 三鬼実歌碑	西茨城郡友部町、北山森林公園	104
50 村上兆平句碑	西茨城郡友部町、詩歌の森	106
51 田崎秀歌碑	笠間市、佐白山観音寺	108
52 長塚節笠間歌碑	笠間市、富士山つつじ公園	110
53 浄意法師藤原時朝問答歌碑笠間市、佐白山公園	笠間市、佐白山公園	112
54 柳橋好雄詩碑	笠間市稲田、稲田姫神社	114
55 藤原光俊歌碑	西茨城郡岩瀬町加茂部、鴨神社	116
56 友常幸一歌碑	西茨城郡岩瀬町岩瀬、北栗山公園	118
57 諷詠堂桜川顕彰碑	西茨城郡岩瀬町磯部、磯部桜川公園	120
58 植田多喜子歌碑	西茨城郡岩瀬町磯部、磯部桜川公園	122
59 市川曲川山極北極句歌碑	真壁郡大和村東飯田、市川邸	124
60 泉浩郎詩碑	真壁郡真壁町桜井、桜井館	126
61 大久保月夜歌碑	つくば市大、大久保卓美邸	128

62 相島虚吼句碑	つくば市小田、相島圭一郎	130
63 大曾根壺仙句碑	つくば市小田西町、竜勝寺	132
64 関せん歌碑	つくば市小田宝篋山麓、関家墓地	134
65 筑波山常磐樹歌碑	つくば市筑波、筑波山南麓	136
66 水原秋桜子句碑	つくば市筑波、筑波山神社	138
67 小林一茶筑波句碑	つくば市筑波、がま園	140
68 白鳥省吾の名月碑	新治郡新治村東城寺、ゆう・もあ村	142
69 ゆうもあ村の筆塚碑	新治郡新治村東城寺、ゆう・もあ村	144
70 東光寺の芭蕉句碑	土浦市大手町、東光寺	146
71 高松宮妃殿下歌碑	稲敷郡阿見町、自衛隊武器学校	148
72 大野我羊句碑	稲敷郡河内村、藤蔵河岸	150
73 勅撰記念歌碑	稲敷郡利根町柴崎、愛宕神社	152
74 朝日商豆歌墓碑	稲敷郡新利根町、姫宮共同墓地	154
75 坂本孝蔵歌碑	稲敷郡桜川村下馬渡、毘沙門堂	156
76 千勝重次歌碑	稲敷郡茎崎町下岩崎、千勝神社	158
77 中河与一歌碑	牛久市城中、雲魚亭広場	160
78 小林一茶琴平神社句碑	北相馬郡利根町布川、琴平神社	162
79 服部嵐雪筑波庵句碑	龍ヶ崎市龍ヶ崎、筑波庵跡	164
80 大野誠夫歌碑	龍ヶ崎市、龍ヶ崎第一高等学校	166
81 大野審雨句碑	龍ヶ崎市龍ヶ崎、愛宕神社	168
82 野竹雨城句碑	北相馬郡藤代町、藤代中央公民館	170
83 桜井きく男句墓碑	北相馬郡藤代町、宮和田共同墓地	172
84 高野素十句碑	北相馬郡藤代町、山王公民館	174

85 小川芋銭先生景慕碑	取手市本町、長禪寺	176
86 沢近嶺歌碑	取手市東二丁目、念仏院	178
87 一本刀土俵入碑	取手市桑原、光明寺	180
88 小林一茶西林寺句碑	北相馬郡守谷町守谷、西林寺	182
89 天神社の芭蕉句碑	水海道市天満町、天神社	184
90 長塚節「土」文学碑	結城郡石下町岡田、旧岡田小跡	186
91 西山葦行歌碑	岩井市大口、服部雄一邸	188
92 独遊南厓句碑	猿島郡総和町大堤、鮭延寺	190
93 空海いろは歌碑	猿島郡猿島町生子、万蔵院	192
94 古河の万葉歌碑	古河市宮前町、渡良瀬川堤防	194
95 長塚節光明寺歌碑	下妻市栗山、光明寺	196
96 糸繰川の万葉歌碑	下妻市比気、糸繰川排水機場	198
97 木村節歌碑	下妻市下妻、新福寺	200
98 与謝蕪村詩碑	結城市結城、妙国寺	202
99 砂岡雁宕句碑	結城市結城、弘経寺	204
100 清宮支峰句碑	下館市岡芹、定林寺	206

参考文献

採採者住所録

1 平潟八幡の芭蕉句碑

所在地 北茨城市平潟町、八幡神社

交通の便 JR常磐線大津港駅より平潟港行バスに乗り終点下車

此あたりに見ゆるものはせを
みなすべし

文政三年庚辰秋七月 常北平潟 敬五亭随和建

秋石斎随時書

黒浦山主萬府代

JR常磐線大津港駅前から、日立電鉄バス平潟行きに乗り、約一、二キロ走ると、茨城県最北端の天然の良港、平潟港に着く。

平潟の港は寛永年間（一六二四―四四）仙台藩が廻米船の寄港地として築港し、仙台陣屋を置き「常州平潟御穀役人」を常駐させ、更に寛文十年（一六七〇）河村瑞軒により東廻航路が開発され、その仲継港として発展したところである。このため港の周辺には人家が密集して殷賑をきわめ、文政十年（一八二七）小宮山楓軒はこの地を訪れ、この狭小な地に二百戸があり、遊女肆七家が軒を並べ、富商や瓦屋が多く、さながら都会のようであったと、その著『浴陸奥温泉記』に述べている。

平潟港バス停でバスを降り、港に沿って北に進むと、港に突き出た断崖上に八幡神社が鎮座している。この神社はもと東町にあったが、海上交通の平安を祈願し延宝八年（一六八〇）現在地に遷座したと伝え、祭神に菅田別命を奉祀している。芭蕉句碑は鳥居前の広場に建っている。

ここからの眺望

は素晴らしく、芭

蕉が貞享五年（一

六八八）六月、岐

阜の賀嶋鷗歩の別

亭十八楼に招かれ

て見た長良川の景

に勝るとも劣らぬ

美景の地で（この

あたり目に見ゆる

ものは皆涼し）の

句碑を建立するに

は最適の地で、ま

さに所を得た碑と

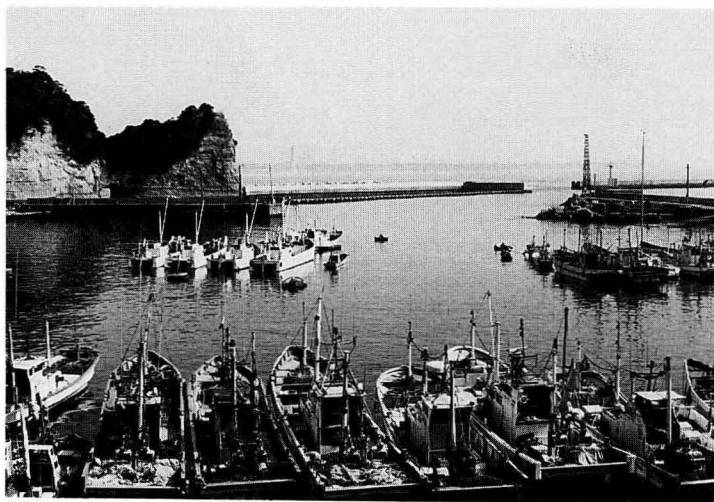
いうことができる。

詩人野口雨情は

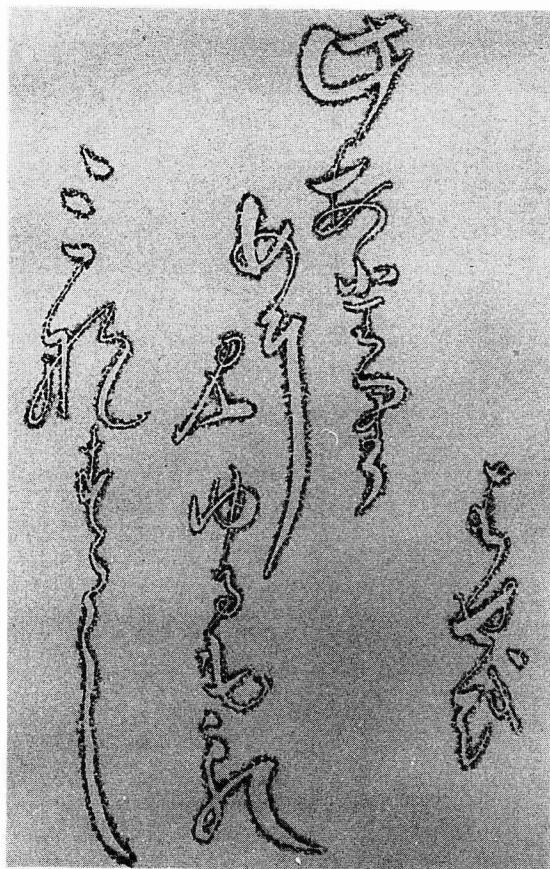
この平潟港をたびたび訪れ、この港をモデルにした「波浮の港」の名作を生み、この歌は大ヒットして一世を風靡した。

アララギ派の歌人斉藤茂吉も大正四年（一九一五）八月、幼な妻を連れて勿来から平潟に来遊し、第二歌集『あらたま』に「海浜雑歌」の十四首を収めた。

いろいろみの汐おちかかる暁方の 舟の揺れこそあはれなりける
まかがよふ真夏なぎさに寄る波の 遠白波の走るたまゆら



野口雨情の「波浮の港」のモデルになった平潟港



句碑の拓影

採拓者・堀込喜八郎



芭蕉句碑 105×104

この碑は八幡神社の別当寺真言宗
黒浦山華藏院の廃寺跡に建っている

断崖上に建つ八幡神社



芭蕉句碑は、芭蕉歿後百二十六年にあたる文政三年（一八二〇）この地に住んだ俳人敬五亭随和によって建てられた。随和には『俳諧吹寄』や常陸の俳人百二家の句を集めて編んだ『多賀の浦』などの編著があり、文化十年（一八一三）浪華の柿耶丸長斉編『万家人名録』に名をとどめている。北俳壇の雄である。この編著は全国有名俳人の画像・略伝・代表句一句を紹介したもので、常陸では本間松江、河野李尺ら九家が収録されており、〈秋の日のくるゝともなく暮にけり〉が入集している。

このほか甫天喜編『はつしぐれ』に〈焚すてゝ月に人なき照射かな〉松風編『月のむしろ』に〈山鳥の思ひ過しぬ小夜時雨〉桂丸編『蚤のあと』に〈鶴の餌を蒔て人去る時雨かな〉蝶夢編『新類題発句集』〈人中を出ぬけて寒し年の市〉など有名人名による編著に数多く入集しているのが見られる。

平潟港をめぐる町中を散策すると、丘陵上に霧雲閣と呼ばれる草葺屋根の建物がある。ここは水戸藩を脱藩した鈴木主水の旧屋敷で、慶応四年（一八六八）江戸品川沖を脱出した寛永寺門跡輪王寺宮能久親王が上陸後休んだことで知られ、訪れる人が多い。

2 日本美術院歌碑

所在地 北茨城市大津町五浦、五浦観光ホテル

交通の便 JR常磐線大津港駅より日立電鉄バス五浦行終点下車

谷中うぐひす初音の血に染む紅梅花

堂々男子は死んでもよい

奇骨俠骨開落榮枯は何のその

堂々男子は死んでもよい

東洋美術研究家で、その先覚的指導者だった岡倉天心は文久二（一八六二）年横浜に生まれた。幼名を角蔵と称しのち覚三と改める。幼時に英語や漢籍を学び、明治八（一八七五）年東京開成学校（のちの東大）に入り政治学、理財学を学んだ。

またこの頃、奥原晴湖に南画を、森春濤に漢詩を学び、笠間藩出身の加藤桜老（東京小石川で大同学舎を経営）につき琴を習った。



岡倉天心顕彰碑

天心著『東洋の思想』冒頭の「亜細亜ハ一な里」の詞が刻まれている。揮毫者は門弟横山大観

明治十九年（一八八九）文部省図画取調掛主任となり、翌年美術取調員として渡欧、同二十一年帝国博物館美術部長となり、さらに新設された東京美術学校の校長となった。

しかし保守派との対立から校長排斥問題が起こり、明治三十一年（一八九八）校長を辞任した。天心の排斥を不当とした美術学校教員橋本雅邦、横山大観、下村観山、菱田春草ら十四人がともに辞表を出すという美術学校騒動事件に発展した。

天心はこれらの画家を中心とする日本美術院を東京の本郷湯島天神表門に創立、新たな出発をした。明治三十七年渡米してボストン美術館顧問となり、この仕事を手伝うべく大観、春草も相次いで渡米した。



天心が思索にふけた赤い六角堂

だがこの間に日本美術院は資金不足から経営難となり、美術院を離脱する会員が出る有様であった。天心は帰朝後五浦や越後の赤倉に土地を買い求め美術院を移転しようと考えた。

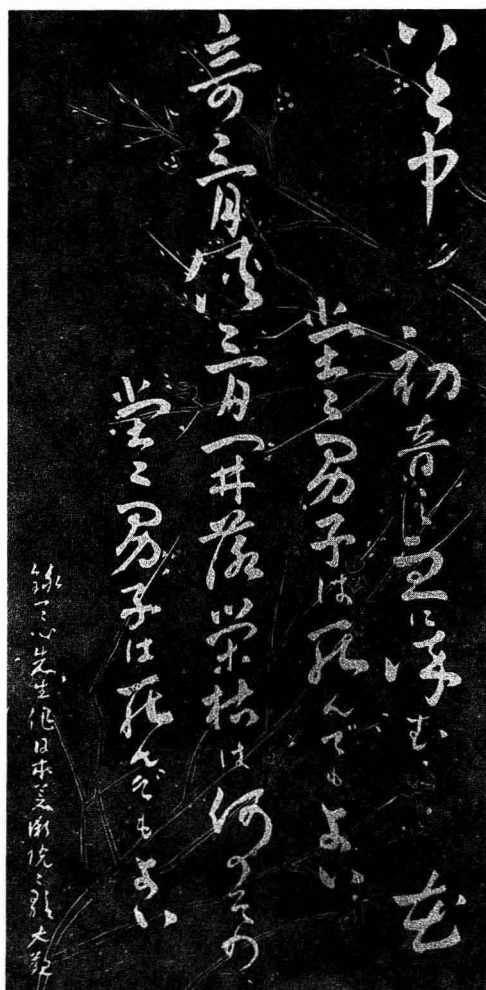
明治三十九年（一九〇六）東京谷中、初音町の日本美術院を売却して五浦に別荘を建てて移り住んだ天心は、大観、観山、春草や木村武山らをこの地と呼び家族とともに移り住ませた。

翌明治四十年（一九〇七）九月二十二日、午後五時から、同所で五浦移住を祝った園遊会が開かれた。東京知名の文芸家、新聞記者ら約百五十名、県内の有志を合すると参加者は三百名にも達し、五浦未曾有の盛況であったという。夜を徹しての酒宴は五浦の海に併して、日本美術院歌が歌われたといわれる。

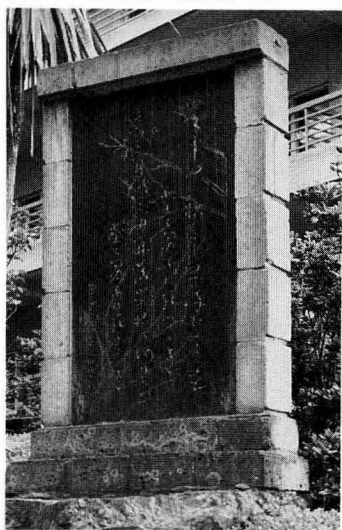
この美術院歌は、上野の山にある美術学校を諷刺しつつ、谷中の美術

院の意気を昂揚するため、明治三十一年（一八九八）の秋、天心自らが作詞したものである。天心的な、絶えず燃えているロマンティックな衝動の唄として有名なものであるが、反面偉丈夫天心が絶えず死というものを身近にひきつけていたことが考えられる。

天心は五浦の地をフランスの画家村バルビゾンにならって、静かな森で自然を描くというロマン溢れる構想をたてたが、しかし肝心かなめの天心は、中国、アメリカにと旅行が続く五浦に席温めることなく、また移転後二年目には目を病んだ春草や家を焼いた大観は東京に帰り、観山、武山も長野、新潟にと不在がちになり、五浦の日本美術院は僅か一年半ばかりの存在にすぎなかった。五浦の地は茨城大学美術研究所となり、後に建てられた五浦観光ホテルの大観別荘があり、歌碑はその入口に建てられている。碑は横山大観が歌中に鶯と紅梅花を描いて揮毫した。



歌碑の拓影 採拓者・堀込喜八郎



日本美術院歌歌碑 155×86
歌碑は横山大観が揮毫したもので
文字の間に鶯や梅花が描かれている

3 野口雨情七つの子詩碑

所在地 北茨城市磯原、精華小学校

交通の便 JR常磐線磯原駅前より駒木行バスに乗り精華小前下車

七つの子
からすなぜ鳴くの
からすは山に
かわい七つの
子があるからよ
かわいかわいと
からすは鳴くの
かわいかわいと
鳴くんだよ
山のふるすへ
行って見てごらん
まるい目をした
いい子だよ



一年（一九〇八）には『夜花朝花』に「山がらす」を発表した。

山 が ら す

鳥なぜ啼く 鳥は山に

可愛い七つの 子があれば

この詩は雨情の最も古い童謡の一つといわれている。

地元の小学校を卒業して、伯父の野口勝一のもとから東京中学校、東京専門学校に学んだ雨情は明治三十七年（一九〇四）父量平の死で磯原の実家を継いだ。この当時までに雨情の民謡創作は始まっていた。しかし、傾いた家産、家庭の不和もあり、明治三十九年（一九〇六）突然樺太に走った。日露戦争により南樺太が日本領となったため、ロシア貿易の野望を抱き、男の夢を賭けたのである。だがその夢も破れて東京に引き揚げ、専ら文学に精進した。

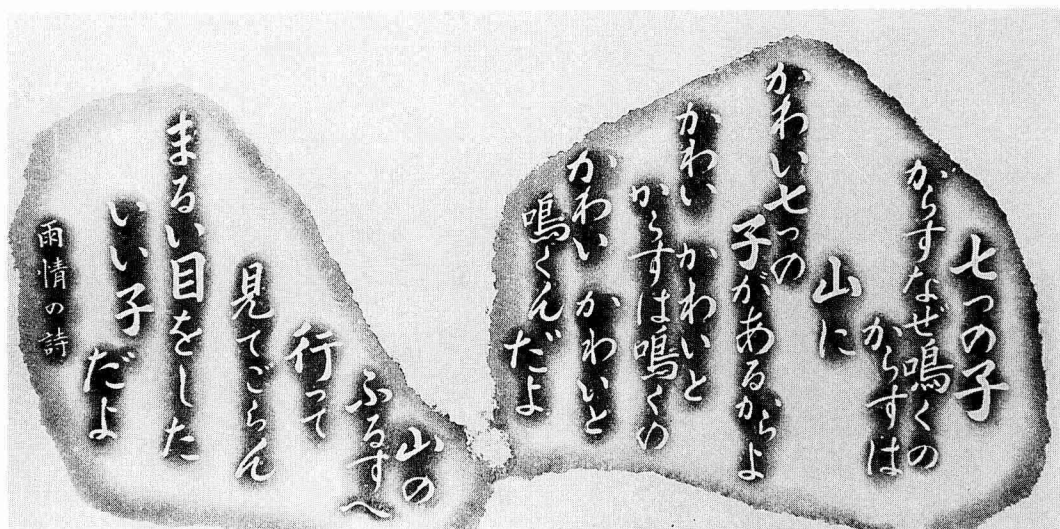
明治四十一年（一九〇八）母の死を機に再び郷里磯原に帰り、植林事業に従事する。東京での長屋暮らしの気軽さとちがって、磯原御殿と呼ばれた名家での生活は雨情にとってまさに煉獄の苦しい毎日であった。その当時の大北溪谷はただ深い谷で、歩いて通うだけでも大変であった。そこへ小屋がけして杉の苗木を植えるのである。

「骨が折れるもんでヤンスよ。三十年もたたなけりゃ一人前の杉になるヤンセンからな。ほんでも杉にはお世話になりヤンしたからな。罪ほろぼしでヤンスよ」（時雨音羽「人生流行歌」）

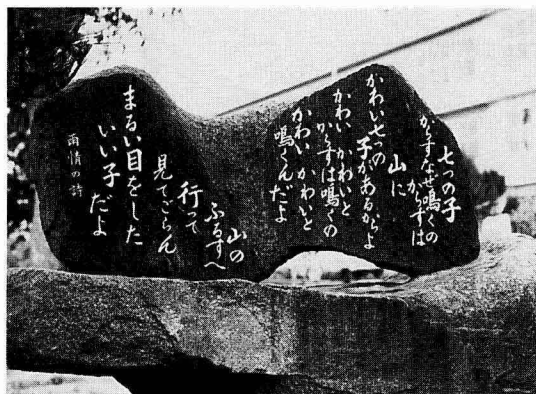
杉のお世話になったというのは、先祖が残してくれた山の杉を伐って生活費に充てたものであったにちがいない。日暮れて家に帰れば、投げ込まれている郵便は自分の出した戻り原稿の山で、たまに売れても一家

明治四十年（一九〇七）一月、旧師島村抱月の示唆により、相馬御風、

小川未明、三木露風らと「早稲田詩社」を結成した野口雨情は、翌四十



詩碑の拓影
探拓者・椛田シヅ



野口雨情詩碑 71×134

を支える生活費にはほど遠いものであった。

「七つの子」はこの大北溪谷の植林時代の体験をもとに、前に発表した「山がらす」を改作、大正十年『金の船』誌上に発表したものである。

この童謡は本居長世の作曲により、大正末期から昭和にかけて広く歌われたが、この歌が一世を風靡したのは昭和二十九年の映画「二十四の瞳」からであった。瀬戸内海の小豆島の小学校を背景に、高峰秀子の扮する大石先生が、児童たちとこの「七つの子」を合唱した。これが印象的で、映画が上映される先ざきで歌われた。

さらに昭和三十三年の東宝映画「雨情」は、詩人としての野口雨情を紹介した映画であるが、この中でも「七つの子」が歌われ、大衆に深く浸透し、野口雨情といえば「七つの子」といわれるようになった。

この雨情詩碑は、雨情の学んだ精華小学校の玄関前の池の端に建てられている。鳥が翼をひろげた形の福島産花崗岩を用いた珍しい碑で、碑文は建碑当時の某校長が揮毫した。しかし「鳥なぜ啼くの」の啼くが「鳴く」になっていたり、「山の古巣に」が「ふるすへ」と一字違っていたりで、雨情会より異議が出たため碑の裏へ背中合せに小さい碑を建てて正しい原詩が刻まれた。磯原では海岸通りに二人の少女が手を組んだ「通りゃんせ」の銅像を建てたが、あとで「通りゃんせ」は雨情作詩ではないことがわかり、台座の碑文を削り、急遽交通安全の碑に鞍替えしたという失敗談もあり、心すべきであろう。

4 西行鶉の島歌碑

所在地 日立市田尻町、鶉の島海岸

交通の便 JR常磐線日立駅より日立電鉄バス田尻浜行に乗り鶉

の島温泉入口下車、徒歩5分

西行法師

大田尻 衣はなきか

はたかしま

沖 ふくか

みにはしまぬか

秀峰書



西行歌碑 139×108

JR常磐線日立駅は、新駅（中央口）と旧駅との二つの顔を持っている。旧駅からのひなびた町並みを見ると一瞬降りる駅を間違えたかと錯覚し易い。駅を中心に中央口に移ったのは昭和二十七年で、日立駅と改称する前は助川駅と呼ばれたのが旧駅である。

海岸口へ降りるとすぐセメント工場の威容が目に入る。工都日立の象徴的な存在であるが、駅前の殺風景な町並みを、今も「西部劇の町」のようだと酷評する人が少なくな

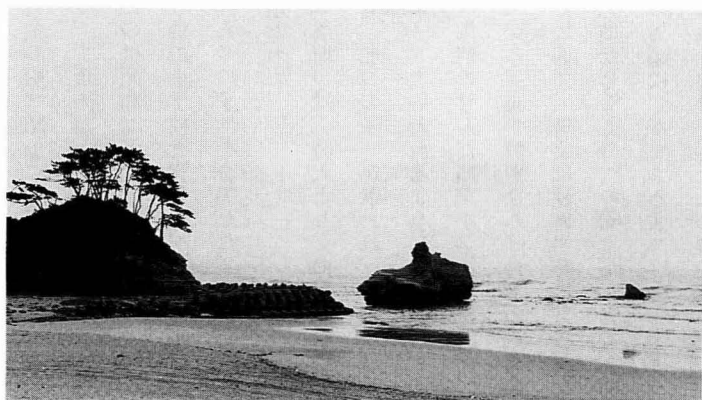
い。ここから日立電鉄バス田尻浜行に乗り、海岸線に沿って十五分も走ると鶉の島温泉入口バス停に着く。ここでバスを降り東に五分も歩くと、裸島と呼ばれる海食岩の小さな島があり、太平洋の荒波が押し寄せている。

この海岸に接した丘陵地に鶉の島温泉旅館があり、西行歌碑は旅館入口の左に建っている。昭和四十六年四月に建碑された。

栗田栗隠著『事蹟雑纂』に

「グミ島（茱萸島）ト云」とあるのが現在の裸島であろうとい

われ、元禄十年（一六九七）の安藤朴翁著『常陸帯』には、「イ



砂浜と断崖の裸島